セダンカ村のイテリメンの民話

小野　智香子

本稿では筆者が1999年8月に記録したイテリメンの民話3編を紹介する。記録地はロシア連邦カムチャツカ州コリヤーク自治管区チギリ村、語り手はアグラフェーナ・ダニロヴナ・イワショヴァ氏である。イワショヴァ氏 は1934年、セダンカ・オセードラヤ村生まれの女性（調査時65歳）で、イテリメン語北部方言（セダンカ方言）の話者である。3編ともイテリメン語による語りを、1.「ほくろ」と2.「コケとツンドラ」はビデオ録画し、3.「海の精」はDATにより録音した。以下はイワショヴァ氏自身がイテリメン語テキストにつけたロシア語逐語訳を参考に、筆者が和訳したものである。イテリメン語テキストについては別の機会に公表したい。

1．ほくろ（実話）

1999.08.09, チギリ村, アグラフェーナ・ダニロヴナ・イワショヴァ氏

これは私のおじいさんが私にしてくれた話である。彼らが住んでいた村[1]に、二人の若者と、大変美しい娘がいた。二人の若者は、彼女と結婚したいと思っていた。彼女はどうしてもどちらか一人を選ぶことが出来なかったが、しかし後にやはり一人の男を選び、結婚した。そしてとても良く暮らし始めた。彼らは良く楽しみ、とても良く暮らし、互いに助け合い、決して一人を置いていくことはなかった。

結婚した時、夫は彼女の左の乳首にとても美しいほくろがあるのに気が付いた。それは大きくてとても目立ち、とても美しい。このほくろのことは彼女の両親だけが知っていたが、今や夫の知るところとなった。ほくろはとても美しく、彼はいつもほくろを見つめ、キスをし、かわいがっていた。彼が狩りや魚捕りでどこかへ出かけて妻の所へ戻った時、妻に会うとすぐに近づいてこっそり尋ねた。

「僕たちのほくろは元気か？」

彼女はすぐ、照れたように言った。

---

[1] セダンカ村。

「元気よ。」
このように、仲良く暮らしていた。
　ある時、この夫は長い間森に出かけていた。一方、彼の友人は家に残った。彼もまた、その娘と結婚したかった。あの二人が結婚したとき、この友人は二人の所に行くのをすっかりやめてしまった。さて、夫が出かけた。彼は女の所に行ったが、女は家にいなかった。外はとても暑く、彼女は水浴びをしに出かけていた。服をすっかり脱いで川に入り、水浴びをし、そこで頭を洗っていた。彼女が家にいないのを見て、男も川へ行った。そして突然あの女が水浴びしているのが見えた。すぐに彼は草の中に隠れてその女を見ていた。そして左の乳首にあるあのほくろを見た。とても美しいほくろだった。その女からは何も見えなかった。女はその後川から出て履き物を履き、きれいにおさげを編んで家に帰った。
　それから時が過ぎ、夫が帰ってきた。彼女はすぐに夫に会った。彼は無事に家に帰ってきた。夫は尋ねた。
「僕たちのほくろは元気か？」
彼女は答えた。
「元気よ。私たちはあなたをずっと待っていました。」
そうしてまた暮らし続けた。
　ある時、友人が彼らの所に来て言った。
「外に出よう。」
彼の友人は言った。
「いいよ、行こう。」
すぐに外に出て、川のそばにすわった。川岸でこの友人は彼に言った。
「俺はおまえの妻の体を知っているんだ。」
「どうしておまえが彼女の体を知っているのか。」
「知っている。」
「彼女はおまえの妻じゃない。どうしておまえが彼女の体を知っているんだ？」
「知っている。彼女の左の乳首にはほくろがある。」
夫はひどく悲しんで、話すのをやめた。彼が家に帰ると、妻は本当に良く出迎えた。彼女は彼に話しかけたが、この夫は彼女を見ようとせず、話そうとしなかった。彼は食べることをやめ、茶を飲むことをすっかりやめてしまった。ただ戸口の所にすわって彼女を見つめ続けた。妻は尋ねた。
「何かあったの？どうしてこんなふうになったの？どこか痛いの？」
「どこも痛くない。」

「じゃあどうしてあなたはこんなふうに何も食べず、眠らず、ただ戸口の所にすわっているだけで私と話さないの？」

彼は彼女に何も言わなかった。彼女の体はもう誰かが知っている。しかし妻は本当に、夫以外は決して知らなかった。

それから、夫はとても気が滅入って、何も食べずに痩せこけて、死んだ。自分の妻に何も話さなかった。彼女のほくろが、実はもう誰かにに見られたということを。こうしてこの夫はほくろのために、痩せこけて死んでいった。

2．コケとツンドラ（伝説）

1999.08.09, チギリ村, アグラフェーナ・ダニロヴナ・イワショヴァ氏

昔々、上流に人々が暮らしていた。そこで、二つの家族にそれぞれ子供が生まれた。一人は男の子で、もう一人は女の子だ。そして彼らに名前がつけられた。男の子はルムルム[2]、女の子はイェーマルク[3]と呼ばれた。この二人ははすでに大きく成長して、結婚したいと思っていた。この時、大人の男たちはコリヤークのトナカイと自分たちの魚を交換するため、コリヤークたちがいる山々に出発しようとしていた。彼らはルムルムに言った。

「さあ、我々とともに急げ。いずれにせよ、もうすぐおまえは結婚する。肉を運んで来なければなるまい。」

ルムルムはすぐに言った。

「私は出発する。ただ、婚約者に前もって知らせなければならない。」

すぐに立ち去った。そしてルムルムはイェーマルクに言った。

「私は今出発する。トナカイの肉を運んでくる。我々はユキヒツジを捕まえるかもしれない。」

するとイェーマルクはすぐに言った。

「出発しなさい。」

そうして彼を見送った。川に近づいた時、そこで彼女は花を、忘れな草を見た。そしてすぐに言った。

---

[2] 'ləmləm' イテリメン語で「コケ」の意。

[3] 'jemalq' イテリメン語北部方言で「ツンドラ」の意。なお南部方言では「ツンドラ」は'kuɨχ'という（Володин и Халоймова, Ительменско-русский и русско-ительменский словарь. Ленинград, 1989）。'jemalq' はコリヤーク語からの借用語である可能性がある。

「ほら、あなたに忘れな草。私を忘れないで。」
そしてすぐに花をルムルムのポケットに入れた。
「帰って来てね。私はずっとあなたを待ち続けます。」
ルムルムはすぐに言った。
「心配するな。いずれにせよおまえの所に戻ってくる。」
そして出発した。そのころはもう秋であった。
すでに川が凍ってきた頃、猟師達は皆家に帰ってきた。しかしルムルムはコリヤーク達の所に残った。彼はそこで良く縫い物をし、料理の上手な、とても美しい娘を見て、すぐにそこに留まった。彼はイェーマルクをすっかり忘れた。長い間、一年間そこで暮らした。
ある時、彼はユキヒツジを狩りに行った。疲れて岩の上に横になった。そしてたまたまポケットに手を入れて寝入った。そしてそこから花を引きだした。あの忘れな草を。ルムルムはすぐにイェーマルクを思い出した。彼はすぐ家に帰って、新しい妻に言った。
「私は故郷に出かける。今いかだを作って、故郷に向かって出発する。」
彼はすぐにいかだを作った。そして川に沿って家に帰ってきた。
一方、イェーマルクはいつも川へ行っていた。彼女はずっとルムルムを待っていた。しかしルムルムは戻ってこなかった。イェーマルクは激しく泣いた。ザイムカ[4]に歩いていった。そこに小さな丘があった。その上にすわって泣き続けた。するとそこに水たまりが出来ていった。そうして彼女は死んだ。後にはただの涙が残った。涙がこの場所を満たしていた。
ルムルムは家に帰ってくると、すぐ尋ねた。
「私のイェーマルクはどこだ？」
すぐに答が返ってきた。
「おまえのイェーマルクはほら、あのザイムカに行った。そこで彼女はいつも泣いていた。今はもう帰ってこなくなった。彼女は全てただの涙になった。」
ルムルムはすぐにその場所に、ザイムカに行った。彼は地面に体を投げ出した。耳を澄ますと、はるか遠くから、彼を呼んでいるような声が聞こえた。
「ルムルム・・・、ルムルム・・・」
彼はすぐに地面を強く抱いた。すると彼が地面を抱いている所、その場所にすぐにコケが生えてきた。そしてコケは至る所そのように這い伸びた。彼が手を置いていた場所、地面を抱いている場所、そして彼がイェーマルクに呼ばれているように聞こえたその場所に、

---

4 セダンカ村にある山の名前。

コケが生えていった。

このようにして、この私たちのツンドラが出来た。今や、ツンドラがある所には、必ずコケがあるのだ。

3．海の精（神話）

1999.08.23, チギリ村, アグラフェーナ・ダニロヴナ・イワショヴァ氏

クスリネク[5]は海岸を歩いていた。何かを探して海岸を歩きに歩いた。疲れて、海岸で横になりぐっすりと眠った。

この海の深いところに海の精の三兄弟が住んでいた。彼らはとてもよい若者だった。彼らは結婚しようと考えた。しかし誰と結婚するのか。とても深い海の中には女性は住んでいない。彼らは地上の者と結婚しようと決心した。

海底から出て海岸を歩いていると、海岸で人が眠っているのが見えた。彼らはすぐに立ち止まって、彼を海の中に運んだ。そこで彼らは、彼に娘がいるかどうか知りたかった。こうして彼らはクスリネクを海の中に連れて来た。クスリネクは目が覚めて、とても良い海の精たちが一緒にすわっているのを見た。クスリネクはいつも食べたがった。親切な精たちはクスリネクによく食事を与えたが、飲ませることはしなかった。クスリネクはたらふく食べて、再び眠った。目覚めると、とてものどが渇いていた。三つの精たちは皆彼の近くに隠れて、彼が何をするか、何を言うかを見ている。クスリネクはとても飲みたかった。彼は自分の一番大きい娘を思い出した。

「とても気だての良い私の子、もう家にいて、きっと水を一杯に満たしてたくさん持って来ただろう。」

彼は水を探し始めたが、見つからなかった。海の精が全ての水を隠してしまっていた。クスリネクはとても飲みたかった。彼は真ん中の子を思い出し始めた。

「髪の長い私の子、もう起きて体を洗い、自分の長い髪をとかしているだろう。」

年上の二つの精たちは言った。

「彼に飲み物をあげよう。とにかく彼には二人の娘がいることがわかった。」

三番目の精は言った。

「今は待とう、まだ飲ませるな。もしかして三番目の娘がいるかもしれない。」

---

[5] 'kusɨneku' ワタリガラス神クトフのこと。

クスリネクはのどが渇いて死にそうだった。彼は三番目の娘を思いだし始めた。

「私は死にそうだ。小さな私の子、きっと自分を見ているだろう。美しい自分の姿を水に映して見ているだろう。」

すぐに三つの海の精たちはおじいさん[6]に飲ませ、よく食べさせた。クスリネクはもう眠らなかった。家に帰りたくなった。海の精たちは彼を家まで運び、彼の娘たちを見ることで意見が一致した。彼らはクジラを呼んだ。クジラの上にすわり、おじいさんもすわらせた。そして家に帰った。

おじいさんは家に帰ると、海の精たちを家の中に呼んだ。海の精たちは家に入った。そして彼の三人の娘を見るとすぐ、彼女たちと結婚したくなった。彼らは娘たちに求婚し始めた。娘たちはこの海の精たちを見た。彼らはなんと美しく、力強いことか。娘たちはすぐに同意した。母クトゲは夫に言った。

「おまえは誰を彼らに渡すのか。どうやって海の中で暮らすのか？」

クスリネクは言った。

「心配するな。私はあそこにいた。海の精たちはとても良く暮らしている。彼らには全ての物がある。彼らは良く助け合い、とても働き者だ。私たちの子供たちは彼らの所で暮らすのだ。」

海の精たちは妻たちをクジラの上にすわらせ、家に向かって出発した。

彼らは暮らし始めた。とても良く暮らし、一度も言い争うことはなかった。太陽が昇るとき、太陽が沈むとき、海の精たちは妻たちをクジラの背中に乗せて海を走り始める。そして彼らが海を走るとき、とても美しい朝焼けが空に現れる。

（おの　ちかこ・千葉大学社会文化科学研究科）

---

[6] クスリネクのこと。